

| | |
|------------------|---|
| Title | 吐谷渾と南北兩朝との關係について |
| Sub Title | Relations of Tu-yu-hun (吐谷渾) with the southern and northern dynasties |
| Author | 和田, 博徳(Wada, Hironori) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1951 |
| Jtitle | 史学 Vol.25, No.2 (1951. 11) ,p.80(207)- 104(231) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19511100-0080 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吐谷渾と南北兩朝との關係について

和田博德

一序

嘗て松田壽男氏は「吐谷渾遣使考」^{〔1〕}を著して、吐谷渾が南北朝時代に東西交通・貿易の媒介者また中繼者として、東アジアの國際關係の上に重要な作用を營んだことを明かにせられた。これは眞に優れた考察で、從來、青海の僻地に蟠居してゐた蠻族として以外には、殆ど史家の顧る所とならなかつた吐谷渾に對して、新なる注目をさせるに至つた勞作であつた。しかし松田氏は吐谷渾の國際關係のうち、その經濟的方面、即ち貿易や商業の面に重きを置かれ、他の政治的方面的關係については殆ど言及せられなかつた。従つて吐谷渾が南北朝時代の政治的國際關係に占めた役割については、未だよく知られてゐないのである。けれども私の見る所では吐谷渾の東アジア國際關係に於ける重要性は經濟的方面よりも寧ろ政治的方面に於いて、更に大きかつたやうに思はれる。こゝにまた私が、松田氏と同じ吐谷渾の南北朝への遣使に關する問題を論ずる所以である。

二 吐谷渾君主と河南王（一）

吐谷渾は今の青海地方に據つて、南北兩朝と交渉を有したから、吐谷渾に關する列傳は宋書・南齊書・梁書・南史・魏書・北周書・北史等の南北朝時代の外國傳を有する正史には皆收めてある。そしてその列傳の名を宋書・魏書・北周書・北史の四史は吐谷渾傳と言ふが、南齊書・梁書・南史の三史は河南傳と稱してゐる。どうして同じ國の列傳の呼稱が異なるのであらうか。これについて松田氏は別に述べてゐないが、戸田茂喜氏は「吐谷渾の西藏名と支那史傳」⁽²⁾を著し、その第三節の「吐谷渾傳と河南傳」に於いて、このことを考察して、

支那正史中の吐谷渾傳は吐谷渾國君主の史傳にして、河南傳は其の一封建王たる河南王の史傳であること。⁽³⁾

といふ結論を述べられた。即ち戸田氏の見る所では河南王と吐谷渾君主とは別人であり、河南王は吐谷渾属下の一封建王であると言ふ。しかし私は河南王と吐谷渾君主とは同一で、河南王とは代々の吐谷渾属下に南朝が授けた王號であつて、決してその封建王などに與へた稱號ではないと思ふ。

よつて先づ吐谷渾の君主を南朝が河南王に封じた事情について説き、吐谷渾君主と河南王との同一を證明しよう。

吐谷渾は五胡の乞伏氏や禿髮氏に阻まれて、江南の東晉とは少しも交渉を持たなかつたが、五胡諸國が滅亡すると、青海から四川を經て江南に至る交通路を確保し、始めて南朝宋へ遣使をしてゐる。宋書卷九十六吐谷渾傳によると、それは宋の建國後、四年目の第二代少帝の景平元年（四二三）のことである。時の吐谷渾君主は第九代の阿豺であつた。この遣使に對して、吐谷渾は始めて江南の漢人王朝から「塞表諸軍事安西將軍沙州刺史澆河公」といふ稱號を與へられたのであ

る。宋書吐谷渾傳にはこれに續いて、阿豺以後の代々の吐谷渾君主に對する宋の冊封記事がある。これを表示すると次の如くである。

| 吐谷渾君主 | 冊封の年 | 封號 |
|------------|------------------------------|--|
| 第九代 阿豺 | 景平元年（四二三） | 塞表諸軍事安西將軍沙州刺史澆河公 |
| 第十代 慕瓌 | 元嘉三年（四二六）阿豺死し、弟慕瓌立つ | |
| | 元嘉七年（四三〇） | 塞表諸軍事征西將軍沙州刺史隴西公 |
| | 元嘉九年（四三二） | 使持節散騎常侍都督西秦河沙三州諸軍事征西大將軍西秦河二州刺史領護羌校尉隴西王 |
| 第十一代 慕延 | 元嘉十三年（四三六）慕瓌死し、弟慕延立つ | |
| | 元嘉十五年（四三八） | 使持節散騎常侍都督西秦河沙三州諸軍事征西大將軍西秦河二州刺史領護羌校尉隴西王 |
| | 元嘉十六年（四三九） | 改封河南王 |
| 第十二代 拾寅 | 元嘉二十九年（四五二）慕延死し、第八代樹洛干の子拾寅立つ | |
| | 元嘉二十九年（四五二） | 使持節督西秦河沙三州諸軍事安西將軍領護羌校尉西秦河二州刺史河南王 |
| 泰始三年（四六七） | 元徽三年（四七五） ⁽⁴⁾ | 進號車騎大將軍 |

右の表によつて河南王の稱號が吐谷渾君主に與へられたのは南朝遣使の最初からでなく、やゝ後のことであり、それ以前には他の稱號が贈られてゐたことが知られよう。故に同じ南朝の正史であり乍ら、宋書のみは河南傳と呼ばないのであらう。南齊書卷五十九河南傳や梁書卷十四河南傳を見ると、第十二代拾寅以後の吐谷渾君主は皆、南齊及び梁代を通じて河南王に封ぜられてゐる。ところで吐谷渾君主の封號は宋初の僅か十六年ばかりの間に澆河公・隴西公・隴西王・河南王と四變したのである。これ程、封號の頻繁に變つた國は恐らくあるまい。これは必ず何か特殊な事情が存するに相違ない。

さて翻つて宋書の本紀を見ると、元嘉十六年以後の條には河南王貢獻の記事が屢々あつて河南王冊封後の吐谷渾の遣使を克明に傳へてゐる。ところが、元嘉十六年以前の條には景平元年に於ける阿豺の最初の貢獻を傳へる記事を除いては吐谷渾の遣使に關する記事が一切無い。それでは景平元年から元嘉十六年までの間、吐谷渾の宋に對する遣使はなかつたかといふに、それは事實ではない。同じ宋書の吐谷渾傳には、慕墳が元嘉六年（四二九）及び同九年（四三二）に、慕延が同十三年（四三六）に遣使したことを傳へた詳しい記載がある。然らば本紀には記錄の脱落や缺除があるのであらうか。しかし他の國の貢獻は幾つも記し乍ら、吐谷渾のだけ書き落すといふのも變である。又、吐谷渾冊封の記事は本紀にも見えるのに、その冊封と不可分の關係にあるべき貢獻の記事を缺くのは可笑しい。かう思つて宋書本紀を見直すと、河南國といふ國が元嘉六年、同九年、同十四年の三回に亘つて遣使をしてゐる記事があるので注意せられる。この中、元嘉六年と九年の貢獻は吐谷渾傳に言ふ慕墳の遣使に當り、同十四年の貢獻は十三年に發した慕延の使者が翌年に宋廷に達したものと見れば、本紀に言ふ河南國の貢獻と吐谷渾傳に言ふ吐谷渾の遣使とは正に一致するのであ

る。さうとすれば宋書本紀には元嘉十六年の河南王冊封以前の吐谷渾の貢獻をも河南國貢獻として記してゐるわけである。何故、隴西公貢獻とか隴西王貢獻とか書いてないのであらうか。

思ふに吐谷渾君主は貢獻の際に宋の授けた隴西公や隴西王といふ稱號に満足せず、自ら河南王と名乗つて通貢したのであらう。しかし宋では未だ河南王といふ稱號を與へてゐないから、こゝに已むを得ず、これを河南國の貢獻として記録したのであらう。宋書本紀の元嘉十六年以後には河南國貢獻ではなく、河南王貢獻とことさら記述の仕方を異にして、河南王冊封以前と以後とを區別してゐるものがある事情によるのに相違ない。因みに宋書本紀の貢獻記事は何れの國も宋の封號によつて記されてゐる。

以上の考察に誤なしとすれば、河南王といふのは宋より元嘉十六年に封ぜられる前から、吐谷渾が自ら稱してゐた王號である。かくの如く吐谷渾が宋の封號を使用せず、河南王といふ自稱王號を用ひて貢獻したのは、勿論その王號に冊封せられんことを求めたものに相違なく、さればこそ宋も僅か十六年の短期間にあれ程頻繁に異例の進號や改封を行つたのであらう。

然らば吐谷渾君主は何故に河南王と自ら稱したのであらうか。

河南とは梁書卷五十四河南傳に、

其地則張掖之南、隴西之西，在河之南，故以爲號。

とある如く、今の甘肅省西部の黃河以南の地を指すのである。而してこの地名は五胡南北朝時代に多く用ひられたらしい、吐谷渾以前にも河南王と稱した者がある。それは五胡時代の西秦の乞伏氏であつて、その事は晉書卷一百五十五乞伏氏載

記や魏書卷十九乞伏氏傳にも見えるが、晉書卷十七吐谷渾傳を讀むと、第六代吐谷渾君主視龜は乞伏乾歸より白蘭王に封ぜられた際に、乾歸のことを河南王と呼んでゐるのである。

これから考へると、河南王とは本來、乞伏氏の王號であつたのである。乞伏氏の領域は今のが甘肃省靖遠縣を首城として甘肃省西部の黃河以南の地である。⁽⁵⁾ なほ乞伏氏は元嘉八年に滅亡してゐるから、宋書本紀に見える河南國貢獻が乞伏氏の遣使である筈はない。

乞伏氏と吐谷渾とは隣り合つた宿敵で、五胡時代には度々交戦し、概ね吐谷渾は弱くて乞伏氏に壓服されてゐた。東晉に早く通貢して、己の地位を高めようとする吐谷渾の企圖が常に乞伏氏によつて阻止されたことは晉書吐谷渾傳に見えてゐる。然るに吐谷渾が乞伏氏に代つて河南王と稱するに至つたのは何故か。

宋書吐谷渾傳には元嘉六年の條に、

（乞伏）熾盤死、子茂蔓立。慕瓊前後屢遣軍擊茂蔓。〔茂蔓〕率部落東奔隴右。慕瓊據有其地。

と吐谷渾が乞伏氏の地を占領したことを傳へてゐる。かくて前述の宋書本紀に見える元嘉六年の始めての河南國遣使の記事は、この年、第十代吐谷渾君主慕瓊が宿敵乞伏氏を破つて、その故地を領し、その據有を南朝に認めて貰ふために河南王と稱して朝貢したことを見出すのであらう。

しかし宋では何故、河南王の稱號を直ちに與へず、後に元嘉十六年になつてから始めて授けたのであらうか。この問題を解くには北魏と吐谷渾との關係を知る必要がある。

三 吐谷渾君主と河南王 (二)

南北朝時代の初め、北魏の發展に伴つて、これまで吐谷渾との間に介在した五胡諸國は亡んで、吐谷渾と北魏も遂に直接に接觸するに至つた。兩國の交渉は北魏の神䴥四年（四三一）に太武帝に破られて、涼州に逃れようとした夏の赫連定を吐谷渾の慕瓊が途に捕獲して北魏に遣送したのに始まる。この第一回の北朝遣使によつて、北魏は慕瓊に大將軍西秦王といふ稱號を與へてゐる。この時、宋から貰つてゐた稱號は隴西公であるから、それに比して高いのも赫連定遣送の獎酬の意を含むのであらう。それで直ぐ翌延和元年（四三二）十月に慕瓊は再び北魏に朝貢してゐる。然るにかうして順調に始まつた吐谷渾と北魏との交渉は、魏書の帝紀や吐谷渾傳によると、その後、北魏の孝文帝の延興四年（四七四）まで四十年餘の間、ほど絶えてゐる。⁽⁷⁾ これは北魏が華北に君臨した約百年の長さに比すると、殆どその前半にも相當する。然るに松田氏は延興四年以後に頻繁となつた吐谷渾の北魏遣使を強調するに急で、この永き絶交を一時の斷絶として、いとも簡単に無視して終はれた。北魏時代の後半の遣使のみを論じて、その前半の断絶を語らないのは如何なものか。而もこの永き断絶の理由や事情は魏書吐谷渾傳に記してあるのであつて、それによると、吐谷渾と北魏との關係が極めて不和であつたがためであり、それが延興四年以後に遣使を行ふやうになるのは、北魏の吐谷渾攻撃によつて、屈服せしめられ、已むなく朝貢するに至つたものなのである。即ち断絶の原因は、西秦王に封ぜられた慕瓊が延和元年、北魏に上表した文と、それに對する太武帝の答の中に見出される。魏書吐谷渾傳には、

慕瓊表曰、臣誠庸弱、敢竭情欵、俘禽僭逆（赫連定）、獻捷王府。爵秩雖崇、而土不增廓。

とあり、太武帝のそれに對する答を載せて、

西秦王（慕瓊）所收金城（蘭州）枹罕（臨夏）之地、朕即與之、便是裂土、何須復廓。……自是、慕瓊貢獻頗簡、又通于劉義隆（帝宋文）、義隆封爲隴西王。

とある。金城・枹罕方面は乞伏氏の故地、即ち河南の西部であるから、この方面だけは吐谷渾の手中に残つたが、殘餘の河南の地は赫連定を追撃した魏軍のために奪はれて終つたので、慕瓊の領土返還要求となり、太武帝が之を拒絶したのであらう。

かくて北魏が吐谷渾の要求を容れなかつたので、慕瓊は北魏と斷絶して、嘗ての西秦等とは比較にならぬ大國北魏を敵に廻すことになつた。この強敵に獨りで對抗するのは吐谷渾にとつて到底不可能である。その年直に慕瓊は宋に遣使して、河南の地の占取權を宋より認めて貰ふべく河南王と稱して、再び貢獻したのである。かうして北魏と絶つて、己の陳營に加はつて來たことは宋にとつて喜ばしいが、河南王に直ぐ封するのは徒らに魏を刺戟する恐れがあると考へ、隴西公を隴西王に上げることに止めたものと思はれる。（隴西王は河南王の如く領域を有する實質的王號ではなく名譽的稱號である。）かくて元嘉十三年、慕瓊が死んで慕延が嗣いでも、翌々元嘉十五年に宋は慕瓊の爵號をそのまま襲はしめて隴西王に封じてゐた。さうして翌十六年、遂に河南王に改封したのであるが、僅か一年にして河南王に改封したのは何故であらうか。

元嘉十六年、即ち北魏の太延五年は北魏が五胡最後の國である北涼沮渠氏を討滅して、北支の統一を完成した年である。これは宋にとつて大なる脅威となつたし、今後は絶対に北魏と兩立し得ぬ感を抱かせられ、從來の協調策も捨てざ

るを得なかつたのであらう。かくてこれまで弱國であり、蕃夷の國として何等重視せられなかつた吐谷渾も宋人の眼には唯一の味方として映じて來た。そこで年來、彼が要求する河南王の稱號を與へて、對北魏策の一環に備へたのであらう。

かくの如く、吐谷渾の河南占領は北魏といふ強敵の出現により、その緒についたばかりで挫折した。しかし吐谷渾は決してその希望を捨てず、河南の地の占取權を飽くまで主張した。かくてこの後の吐谷渾君主は代々南朝から河南王に冊封せられたのである。

されば、南朝に對しては終始變らざる朝貢を行つたにも拘らず、他方北魏には前述の如く、最初の遣使後、殆ど四年間も通貢を絶つてゐた。従つて北魏側でも第十一代慕延及び第十二代捨寅（四五二—四八一）の爵號は第十代慕瓊に與へた西秦王よりも低い西平王に封じ、（國名を負つた西秦王よりも郡名を負つた西平王の方が低いことは明かである。）更に捨寅の次の第十三代度易侯⁽⁸⁾（四八一一四九〇）には遂に何の爵號をも與へなくなつて終つたのである。そして、第十四代の伏連籌（四九〇—五四〇）に至り、後述の如き事情によつて再び冊封を行つたが、その稱號は吐谷渾王であった。吐谷渾王とは吐谷渾のみの支配者といふ意に相違ないから、かゝる稱號を改めて北魏から貰つても事實吐谷渾の王である伏連籌には大して有難味も感ぜられなかつたであらう。まして南朝側から同じ君主は河南王に冊封されてゐたのであることを思へば尙更である。

以上によつて、吐谷渾君主を南朝が河南王に封じ、北朝がさうしなかつた所以は明かになつた。

かく考へれば、戸田茂喜氏が河南王を吐谷渾君主の一封建王とし、吐谷渾君主と南朝の冊封した河南王とは別人であるとする説は成り立たないと思ふ。河南王とは吐谷渾君主その人の渴望する自稱王號なのであつて、決して吐谷渾王とは別の一封建王ではないのである。

四 吐谷渾と南北兩朝

吐谷渾君主に南北兩朝が夫々與へた封號の相違によつて、吐谷渾と南朝との親善關係及び、それと對蹠的な吐谷渾と北朝との敵對關係を窺ひ得たのであるが、尙、この關係は北魏の度重なる吐谷渾征討及び、その際に於ける南朝の吐谷渾應援によつて更に具體的に知ることが出来る。

魏書吐谷渾傳を讀むと、北魏の吐谷渾討伐の記事に満たされてゐて、こゝにそれを一々記す餘裕もないが、主なものを擧げると、先づ太平眞君五年（四四四）には北魏の太武帝が親征し、翌六年にも連續して攻撃を行ひ、この時は吐谷渾領全城に魏兵の至らざるなき程の徹底的な討伐であつた。そして遂に慕延は辛うじて逃れ、漸く宋の援によつて舊土に復するを得たのである。これについて魏書吐谷渾傳には征伐の記事に續けて、

慕利延（宋書）……遣使通劉義隆（宋文帝）求救、獻烏丸帽・女國金酒器・胡王金釧等物。義隆賜以牽車。七年、遂還舊土。

とあり、宋書吐谷渾傳にも同じ事件を、

索虜拓跋燾（北魏太武帝）遣軍擊慕延大破之。慕延索部落、西奔白蘭、攻破于闐國。慮虜復至、〔元嘉〕二十七年、遣

吐谷渾と南北兩朝との關係について（和田博徳）

使上表云、若不自固者、欲率部曲入龍涸(四川松潘)・越巂(四川西昌)門。并求牽車、獻烏丸帽・女國金酒器・胡王金鉗等物。
太祖(宋文帝)賜以牽車。若虜至不自立、聽入越巂。虜竟不至也。

と傳へてゐる。これによつて北魏の征討のため滅亡に瀕した吐谷渾に對する南朝の好意的應援の狀が窺へよう。

第十一代慕延に嗣いだ第十二代拾寅の時には北魏の吐谷渾に對する壓迫は益々甚しく、殊に延和元年(四三二)以來絶えたその朝貢を屢々促した。かくて拾寅は魏に敗れると、已むを得ず遣使するが、南朝の援助によつて、その勢力が回復すると、又遣使しなくなるのである。即ち魏書吐谷渾傳に和平元年(四六〇)の討伐戦を載せて、

顯祖(北魏獻文帝)復詔上黨王長孫觀等、率州郡兵、討拾寅。軍至曼頭山。拾寅來逆戰。觀等縱兵、擊破之。拾寅宵遁。於是、思悔修藩職、遣別駕康盤龍、奉表朝貢。

とある。元來、吐谷渾と北魏とは乞伏氏故地の問題以來、不和の關係にあつたから、吐谷渾が朝貢しないのも當然で、それを討伐して無理に朝貢させても、暫く經つと又しなくなる。かかる狀態が前述の如く、延和元年の慕瓊の遣使以來四十餘年の間、續いた後、延興三年(四七三)に北魏は吐谷渾を必ず朝貢せしめるための大討伐を行ひ、拾寅の子を人質とした。魏書吐谷渾傳はこれについて、

詔平西將軍廣川公皮歡喜、率敦煌・枹罕・高平諸軍爲前鋒、司空上黨王長孫觀爲大都督以討之。觀等軍入拾寅境、芻其秋稼。拾寅窘怖、遣子詣軍、表求改過。觀等以聞。顯祖以重勞將士、乃下詔、切責之、徵其任子。拾寅遣子斤入侍。

と記し、魏書帝紀には拾寅の子を入れさせたのを翌延興四年(四七四)二月のこととしてゐる。そしてその翌月の三月

から吐谷渾の北朝貢獻は始めて南朝に劣らず盛んに行はれるやうになるのである。後に頻繁となる吐谷渾の北魏遣使もその初めはかくの如く北魏の度重なる征討の結果、始まつたのであるから、この遣使が松田壽男氏の説かれた如く、吐谷渾の貿易慾からのみ起つたものとは考へられない。従つて南北朝時代に吐谷渾が青海の僻地に國を成し得たのも東西交通の貿易路を確保してゐた爲めとすることは出来ない。吐谷渾の南北兩朝に對する遣使は經濟的欲求よりも遙かに政治的理由が然らしめたものなのである。もし吐谷渾の遣使が貿易であるならば、南北兩朝に對して同様に遣使する筈であらう。

魏書吐谷渾傳には「拾寅自恃險遠、頗不恭命、通使于劉彧（宋明帝）」とあつて、拾寅が南朝にのみ通貢して、北朝には通貢しなかつたことを明言してゐる。又、宋書吐谷渾傳には「拾寅東破索虜、加開府儀同三司」とある。拾寅が索虜即ち北魏を破つたことは、他の記録には見えないから、これは北魏の一軍を局地戦で破つたことでも言ふのであらうが、これによつても南朝の吐谷渾援助の事實が窺へよう。拾寅に嗣いだ度易侯（四八一—四九〇）の代は短かかつたので、この間には北魏の大討伐も無かつたが、南朝が河南王に封じたに對し、北魏は魏書吐谷渾傳に「拾寅死、子度易侯立、遣其侍郎時眞、貢方物、提上表稱嗣事」とある如く、嗣位を報ずる遣使を行つてゐるにも拘らず、何の稱號をも與へてゐないのである。蓋し北魏は既に吐谷渾に對する討滅策を決してゐて、また冊封して懷柔策を探る必要は認めなかつたのであらう。度易侯に嗣いだ第十四代伏連籌の時にも、度々北魏の群臣は吐谷渾征討を奏請したが、漢化した孝文帝は儒教主義によつて之を許さなかつた爲め、吐谷渾も漸く北魏の討伐から免れた。かくて孝文帝は頻に伏連籌の入貢を促したが、伏連籌は應ぜず、太和十六年（四九二）に始めて吐谷渾王の封號を受けたので、孝文帝は自己満足したのであ

る。蓋し儒教的な考へによると、冊封や朝貢は中國王朝への服従を意味するからである。しかし伏連纂はこの時、南朝から河南王に封ぜられてゐたし、後述の如く吐谷渾としては最盛期にあつたから、この受爵を勿論として喜ばなかつたであらう。

かくの如く吐谷渾は南朝に對しては親密であり、北朝に對しては疎遠であつた。從來の論者の誤解はすべてこの吐谷渾と南北兩朝との關係を明かにされないために起つたとしてもよいであらう。

五 南朝と柔然と吐谷渾

以上で明かにされた如く南朝は吐谷渾に對して一度も攻撃を加へたことが無いばかりでなく、よく北魏の壓迫に堪え兼ねた吐谷渾を救つてゐるのである。

然らば何故南朝はかくまで吐谷渾を應援するのであらうか。それは吐谷渾が南北兩朝の中間にあつて、此の國を味方に置いて置くことは南朝にとつて有利であつたがためであらうと先づ考へられる。しかしこれには疑問がある。何故ならばそれでは北魏は如何して吐谷渾を味方にしようと少しもしないのであらうか。北魏は河南の地をめぐつて兩立し得ぬ理由があるとしても、南朝は同じく南北兩朝の中間にあつた楊氏の武都國に對しては時に攻撃を加へ、時に援助を與へてゐて、吐谷渾に對する如く、終始變らざる援助を行つてゐない。

然るに南朝と吐谷渾とが常に親密であつたのは何故であらうか。

この理由を解くためには吐谷渾が南朝と柔然との連絡路に當つてゐたことを知る必要がある。南北朝時代に南朝は北朝に比して、かなり實力が劣つてゐたやうである。例へば兩朝の戸口數を調べても、志田不動磨氏の計算によると、大體五對一以上の差がある。⁽¹⁰⁾ その上、氣風が北朝は武強であり、南朝は文弱であつたから、南北朝を通じて、常に北朝が攻撃的で、南朝は受身に立つてゐた。⁽¹¹⁾ それにも拘らず、南朝がよく北朝に對立し得たのは何故であらうか。その最も大きな理由として北朝の背後に柔然があつて、之を牽制してゐたことが挙げられよう。而もこの柔然と南朝は北朝を挟んで、互に連絡を取り、同盟を結んでゐたのである。今、その證據を二三、述べると、宋書索虜傳には有名な元嘉二十七年（四五〇）の戰役に於ける宋の文帝の開戰の詔が載せてあるが、その一節に、

芮芮間使適至、所說並符、遠諭誠欵、誓爲犄角。

とあり、芮芮即ち柔然が間使して宋に來り、南北相應じて北魏を伐たうとしたことが知られる。宋書芮芮虜傳には、

芮芮常南伐索虜、世爲仇讐、故朝廷常羈縻之。

とある。又、南齊書芮芮虜傳には、

昇明二年（四七八）、太祖（蕭道成）輔政。遣驍騎將軍王洪軌使、剋期共伐魏虜。建元元年（四七九）八月、芮芮主發三十萬騎南侵、去平城七百里。魏虜拒守、不敢戰。芮芮主於燕然山下、縱獵而歸。上初踐阼、不遑出師。

とあり、この文に續けて、

〔建元〕二年（四八〇）、三年（四八一）、芮芮主頻遣使貢獻貂皮雜物、與上書、欲伐魏虜。

とある。この外にも南朝と柔然とが協同して北魏を伐たうとした事例はいくらも見出されるが、これだけでも、南朝が

北魏に對抗するため、柔然と結んだ事實は明瞭であらう。それではこの緊密なる南朝と柔然との連絡は如何にして行はれたのであらうか。北魏を謀る使命を帶びた使者が北魏領を通過することは不可能であつたから、その東方か西方を迂回するより外はない。しかし、東方は當時の航海術を以てしては越え難き大海であるし、肝腎の柔然の領土が、東方には延びてゐない。而も北魏に地を接した高句麗は吐谷渾と異つて、北魏と親しかつたのである。⁽¹³⁾ こゝに南朝と柔然との連絡地となつたのが西方の吐谷渾である。吐谷渾が南朝と柔然との交通路であつたことは既に松田氏も論ぜられた如くである。南齊書芮芮虜傳には「芮芮常由河南道抵益州」とあるが、河南道とは即ち吐谷渾を通ずる道に外ならない。

柔然の最初の宋遣使は宋書本紀によると、元嘉十九年（四四三）であるから、南朝と柔然との交通はこの頃から始まつたのであらう。それはかの太平眞君五年の魏の吐谷渾討伐の一年前で、慕延が始めて河南王に封ぜられた後三年目である。即ち宋の吐谷渾に對する援助が本格的になり、北魏の吐谷渾攻撃も始まつた頃である。そしてこの後、宋・齊・梁を通じて頻繁な柔然の南朝への遣使があつたことは、松田氏も指摘せられた如くである。

南朝が吐谷渾を救援し、その存續を圖つたのは吐谷渾の興廢が南朝自身に大いに關係があつたからであり、これに反して、北魏があくまで吐谷渾の討滅を企てたのは南朝と柔然の連絡を遮断するためであつたに相違ないのである。

六 吐谷渾の西域進出

吐谷渾は第十四代伏連籌（四九〇—五四〇）の時になると、吐谷渾史上最も富強を誇るに至つた。魏書吐谷渾傳には、「伏連籌内修職貢、外并戎狄、塞表之中、號爲彊富。準擬天朝、樹置官司、稱制諸國、以自誇大」とあつて、その狀態

を記してゐる。嘗ては南朝の救援によつて僅かに命を維いでゐたやうな吐谷渾がかくの如き富強に至つたのは如何なるわけであらうか。それは北魏の侵攻が伏連籌の頃から全く無くなつたためであらう。北魏の武力は太武帝の頃を絶頂として、その後、孝文帝の漢化政策以來漸く衰へ、國內の統治にのみ握持して、何等對外的發展を見なくなつて終ふのである。このやうな情勢は唯に吐谷渾を嘗てなく安全にしたばかりでなく、北魏のかゝる對外的退嬰によつて、吐谷渾は西域にまで進出する機會を得たのである。かくて梁書河南傳に、

其(河南)界東至壘川、西隣于闐、北接高昌、東北通秦嶺、方千餘里。

とあるやうな廣い疆域を吐谷渾は有するに至つたのである。吐谷渾がかゝる廣大な領土を有したことは梁書に始めて見えるから、これは梁代のこと間に相違なく、梁代は正に伏連籌の世に當るのである。吐谷渾の西域進出を松田氏は宋代に當る拾寅の時とせられてゐるが、それが正しくないことは更に次の事實によつて證明されよう。

梁書卷五諸夷傳には「西北諸戎」として高昌・龜茲・于闐・波斯・滑(エフタル)等の西域諸國の詳しい記載を收め、その中に遣使貢獻の年代を明記してあり、梁書の本紀にもこれ等諸國の貢獻が傳へてある。河西を通ずる古來の中華西城間の孔道を北朝に壟斷せられた南朝梁に西域諸國が遣使し得たのは、松田氏が明かにせられた如く西域南道を東行し、鄯善より折れて東南に間行し、ツアイダム・青海を経て、岷江に沿つて四川に出づる路線、即ち吐谷渾を經由して行はれたものに相違ない。⁽¹³⁾

ところで西域諸國は何時から吐谷渾を通つて南朝へ遣使するやうになつたのであらうか。松田氏は言及せられなかつたが、同じ南朝の正史でも梁の前代の宋書と南齊書には西域諸國に關する列傳が無い。そして兩書の本紀にも西域諸國

が貢獻したといふ記事は見えない。⁽¹⁴⁾ これは梁書と比べて顯著な相違である。然らば西域諸國は宋と齊とには遣使しなかつたのではからうか。梁書西北諸戎傳の序を見ると、

西北諸戎、漢世、張騫始發西域之迹。……魏時、三方鼎時、日事干戈。晉氏平吳以後、少獲寧息。徒置戊己之官、諸國亦未賓從也。繼以中原喪亂、胡人遞起、西域與江東隔礙、重譯不交。呂光之涉龜茲、亦猶蠻夷之伐蠻夷、非中國之意也。自是諸國分并、勝負強弱、難得詳載。明珠翠羽、雖物於後宮。蒲梢龍文、希入於外署。有梁受命、奉其正朔、而朝闕庭者、則仇池・宕昌・高昌・鄧至・河南・龜茲・于闐・滑諸國焉。今綴其風俗、爲西北戎傳云。

とあつて、梁代までの西域と中國との關係が要約してあるが、この文によると、五胡時代以來、江東と西域との連絡は絶えてゐたが、梁が興つてから始めて西域諸國の朝貢を見るに至つた如くに察せられる。これには東晉・宋・齊時代の西域遣使については何も述べてない。しかし梁書であるから梁の前代の貢獻を故意に省いたかも知れぬと一應疑はれようが、一方同じ梁書諸夷傳中の海南諸國傳の序には、有名な吳の遣使の後に、「晉代通中國者蓋歟、故不載史官。及宋齊、至者有十餘國、始爲之傳。自梁革運、其奉正朔、脩貢職、航海歲至、踰於前代矣、今採其風俗粗著者、綴爲海南傳云」

とあり、同じく東夷傳の序には「自晉過江、泛海東使、有高句麗・百濟。而宋齊間、常通職貢。梁興又有加焉。扶桑國在昔未聞也、普通中、有道人、稱自彼而至。其言元本尤悉、故并錄焉」とあり、何れも晉宋齊代に海南、東夷諸國の貢獻のあつたことを明言してゐる。然るに獨り、西北諸戎傳の序だけが、東晉・宋・齊への遣使を全く記してゐないのは梁代以前の江南王朝には西域諸國の貢獻がなかつたらうことを推測せしめるのである。

そこで梁書西北諸戎傳に載せられた西域の各國の記事について一々調べると、そこに記されてゐる各國の貢獻年代は

すべて梁代であつて、前代のものは一つも無い。そして中には滑國（エフタル）の如く、

自魏晉以來、不通中國。至〔梁〕天監十五年、其王厭帶夷栗隨、始遣使獻方物。

とあつて、梁の時、始めて貢獻したことの明記してある國がある。又、龜茲傳にも、梁代に始めて江南に貢獻した旨が見える。南史卷十七西域諸國傳は梁書西北諸戎傳の中の西域諸國の傳と殆ど同一で、南史は梁書に基づいたものと思はれるが、南史によると、更に于闐國の條に、「于闐者西域之舊國也。梁天監九年、始通江左、遣使獻方物」とあり、渴盤陥國の條に、「梁中大同七年、始通江左、遣獻方物」とあり、末國の條に、「梁普通五年、始通江左、遣使來貢獻」とある。かく梁書と南史を併せ讀めば、兩書に載る西域諸國の殆んどすべてが、梁代に始めて遣使したことを明記しているのである。

凡そ外國傳の常として、若し前代に貢獻したことがあれば、その事は大概記してある。だから梁書・南史の西域諸國の傳の全部に東晉・宋・齊時代の貢獻を傳へてないといふのは、實際に西域諸國の貢獻が梁代だけで、その前代には全く無かつたことを示すものであらう。現に同じ梁書西北諸戎傳中に收められた河南（吐谷渾）・宕昌・鄧至・武興（仇池）等の、西域でなく、中國の西北部に位置した諸國の傳には皆宋齊代の貢獻の事實を記してゐるのである。（同傳の序によると、河南・宕昌・鄧至・仇池諸國も梁に始めて朝貢したやうに記してあるが、これは明かに矛盾であるから、これらの中中國西北部諸國の名は本來序文から省かるべきであるのが、誤つて入れられたのであらう。これら諸國は皆南北兩朝の中間にあつて南朝と接してゐるから、西域諸國と異り、南朝に通貢することは可能である。従つて宋書や南齊書にもその列傳にこれ等の國は載せてある。）

以上によつて西域諸國が梁代以前の江南王朝に遣使しなかつたことは確かであると思ふ。

然らば西域諸國が梁代以前の江南に貢獻しなかつたのは如何なるわけであらうか。魏書の帝紀や西域傳によると、當時、北魏には頻繁なる西域諸國の貢獻があつたのであるから、北支と西域との間には交通を阻礙する事情は何も無かつた筈である。

これは西域諸國の南朝遣使路である吐谷渾を通ずる道が梁代以前には開けてゐなかつた爲めと解する外はあるまい。即ち吐谷渾が西域と南朝との中繼者の役割を演じたのは梁代以後なのである。而して後述の如く梁末に西魏が四川を占領してよりは吐谷渾と南朝との連絡は全く遮斷されるから、吐谷渾を通じて西域諸國と南朝との間に交通があつたのは梁代のみに限られる。梁書の本紀によると、西域諸國の最初の貢獻は天監二年（五〇三）に於ける龜茲の遣使であり、最後の貢獻は中大同元年（五四六）に於ける渴盤陀の遣使である。従つて吐谷渾を通ずる西域と南朝間の交通もほぼこの間に行はれたと見るべきであらう。

もし松田氏の言ふ如く吐谷渾が鄯善・且末を占領して、東西交通路を確保したのが宋代に當る拾寅の頃にあつたとすれば、西域諸國は吐谷渾を通じて、南朝宋齊に早くから遣使してゐなければならぬ。然るに梁代に至つて始めて西域諸國の南朝遣使があつたのは、伏連籌の時に吐谷渾が始めて西域に進出したことを示すものであらう。而も前述の如く拾寅の頃は吐谷渾は窮迫してゐて、とても西域に進出して貿易をする餘力など無かつたのである。

さればこの點から考へても吐谷渾が南北朝を通じて東西交通の貿易路上に活躍し、この國の存立がこれに係つてゐたやうに説くのは正しいとは思はれない。少くとも吐谷渾が東西貿易に活躍し始めたのは南北朝も後期の梁代に當る伏連

籌の頃からとしなければなるまい。かやうに吐谷渾の西域進出も、又その結果生じた青海經由の東西交通路の保持も、北魏の西方に對する勢力の衰へたのに乘じたのであるから、北魏の強力な間は到底左様なことの出來る餘裕はなかつたのである。

かうして吐谷渾は北魏の國力が愈々衰へた北魏末に於いて、吐谷渾としての最盛期を現出した。恰もこの時、梁の武帝の盛世で、南朝の最も繁榮せる時代に當つてゐたことも偶然であるまい。梁書河南傳に、「其（河南）使或歲再三至、或再歲一至、其地與益州隣」とあり、吐谷渾と梁との密切な交渉を傳へてゐるが、この交渉は吐谷渾の繁榮に必ず利したに相違ない。そしてこの時こそ吐谷渾が東西貿易の仲介をしたことであらう。

なほ吐谷渾最盛期の君主伏連籌は、南齊書や梁書の河南傳には休留茂或は休運籌と記してあるが、これは別名若しくは譌誤と見るべきで、戸田茂喜氏の如く、皆別人となし、伏連籌は吐谷渾君主で、休留茂或は休運籌はその一封建王たる河南王であるとするのは正しくあるまい。何故ならば河南王の領域として梁書に傳へてあるのは如何なる吐谷渾君主も嘗て有さなかつた廣大な領域ではないか。戸田氏の説の如くであれば、吐谷渾君主伏連籌の領域は一體何處にあるのであらうか。又、梁書が伏連籌のことを少しも記してゐないことになるが、これも頗る不合理であらう。戸田氏の説は河南王が南朝に對する吐谷渾君主その人の自稱王號であることを悟らずして、單なる別譯若しくは譌誤による王名の相違から想ひ着いた誤解に過ぎない。

七 吐谷渾の衰運

伏連籌の時の吐谷渾の繁榮も永くは續かなかつた。伏連籌の次の第十五代夸呂（五四〇—五九一）の代には早くも衰勢に向つた。これ程速かに吐谷渾が衰へるのも、吐谷渾の盛衰が南北兩朝との關係に頼つてゐて、吐谷渾自身の力に基づいてゐないためであるが、その主たる原因是北魏が滅亡すると、その後に西魏が興つて（五三五）、また吐谷渾に新たな壓迫を加へるやうになつたことである。而してこれに引き續いて更に大きな打撃を吐谷渾は蒙つた。それは梁末の内亂に乗じて、西魏がこれまで南朝領であつた四川を占領して（五五三）、吐谷渾の南朝遣使路を完全に遮断して了つたことである。こゝに至つて、あれ程吐谷渾に役立つた南朝の援助路も全く絶たれることとなつた。従つてこれより吐谷渾がひたすら衰勢に赴くのも當然であらう。しかし吐谷渾にとつて未だ幸であつたのは華北が東西魏に分立したことであつて、このために吐谷渾は南朝の代りの援助者を一應東魏及びその後繼の北齊に求めることが出来た。即ち吐谷渾は東魏や北齊と結んで、その援助により、隣強の西魏や北周の攻撃力を減殺しようと圖つたのである。

かくて北史吐谷渾傳に、吐渾の夸呂が東魏の孝靜帝と婚姻を通じたことを述べて、

「夸呂」又薦其從妹、靜帝納以爲嬪、遣員外散騎常侍傅靈欽使於其國。夸呂又請婚、乃以濟南王匡孫女、爲廣樂公主以妻之。此後、朝貢不絕。

とある如き親密な關係を西魏・北周を挟んで相互に維持したが、吐谷渾と東魏・北齊との連絡は、北史吐谷渾傳に、「夸呂乃遣使人趙吐骨真、假道蠕蠕頻來」とあるやうに道を蠕蠕即ち柔然に假り、柔然が亡びると、吐谷渾の強敵となつた

新興の突厥の目を掠めて、西魏・北周の北邊を遙々と沙漠を越え迂回して行くのであるから、到底南朝との間に於ける程容易ではない。而も更に困難なことは、どうしても涼州に於いて河西に伸びた西魏や周の領土を横断しなければならないのである。周書吐谷渾傳には、

夸呂又通使於齊氏。涼州刺史史寧覩知其還、率輕騎襲之於州西赤泉、獲其僕射乞伏觸拔・將軍翟潘密、商胡二百四十人、駢驥六百頭、雜綵絲絹以萬計。

とあり、涼州に於いて吐谷渾の使者が北周の刺史に襲はれたことを報じてゐる。

かうして吐谷渾はその國運の保持の努力をするにも拘らず、西魏や周の攻撃に敵し得ず、次第に衰へて行くのである。

周書吐谷渾傳には、

詔賀蘭祥・宇文貴率兵討之。夸呂遣其廣定王・鐘留王拒戰。祥等破之。廣定等遁走。又攻拔其洮陽・洪和二城、置洮州而還。

とあり、これは周書明帝紀によると、武成元年（五五九）のことであるが、吐谷渾の領土は周のために侵略されたのである。二年後の保定元年（五六一）には更に重大事が起つた。即ち周書武帝紀の保定元年の條に、

四月丁酉、白蘭〔羌〕遣使獻犀甲鐵鎧。

と見える。白蘭羌とは吐谷渾が青海地方に定着後、最も早く服屬し、爾來永くその支配下にあり、第六代の視麌が乞伏乾歸から白蘭王に封ぜられたのも此の故である。その白蘭羌が周に遣使したのはこれまで吐谷渾の支配下に沒して表れなかつたのが、ほぼ獨立状態になつて吐谷渾より離れたからであらう。白蘭羌が周書以後、吐谷渾とは別に列傳に載る

のものためである。これは吐谷渾の勢力の如何に衰へたかを如實に示すものである。又、周書吐谷渾傳には、

天和初、其龍涸王莫昌率衆來降、以其地爲扶州。

とあり、龍涸即ち今の四川省松潘縣が周領となつたと傳へてゐるが、龍涸こそは吐谷渾の南朝遣使路の門戸であつた所なのである。今や援助者南朝を失つた結果は覗面に相ついで現れて來た。かくの如く吐谷渾は北周に侵略されて、國も亂れ始める。周書吐谷渾傳に、

建德五年（五七六）、其國（吐谷渾）大亂。

とあり、周は此の機を逸せず大討伐を行つた。この文に續けて、

高祖（武帝）詔皇太子征之（吐谷渾）、軍渡青海至伏俟城。夸呂遁走。虜其餘衆而還。

とあり、夸呂の居城たる伏俟城までも攻め込んだのである。而も此の頃、柔然に代つて興つた突厥も周と結んで、吐谷渾を討つに至つた。⁽¹⁵⁾蓋し、柔然は南朝との連絡地として、吐谷渾を保護したが、突厥にとつて吐谷渾は南朝との連絡地でないのみならず、反つてその掠奪の目的地であつたのである。

かくて南朝・柔然との連絡を失つて以後の吐谷渾は相つぐ周の強壓によつて、今や滅亡の一歩手前に至つた。しかし北周の武帝は北齊を滅して、華北を統一したが、間もなく隋が之に代り、吐谷渾の討滅も隋に引き繼がれた。隋は吐谷渾を滅して郡縣を置いたが、短命にして亡ぶと、吐谷渾も再び興り、唐初に至つて、唐の攻伐を受け、吐谷渾は遂に全く亡んだ。吐谷渾が古來、國家の存立し得なかつた青海地方によく永き國運を維持したのは、南朝と柔然との連絡地に當り、南朝の保護を受けて、北魏に對抗することが出來たからであり、從つて、此の國は南朝との連絡が絶えると共に

衰へ、隋唐帝國の統一によつて、その存在理由を失ひ、滅亡したとするべきであらう。

考へて見るに、古來華北を支配した王朝は漢は勿論、三國の魏も、五胡の燕も皆、高句麗征伐を行つてゐる。然るに北魏は一度も高句麗を討たなかつたのみならず、最もこれと親和であつたのは、南朝・吐谷渾・柔然の連合による南西北三面からの包囲を免れようとした爲めではなからうか。然りとすれば、當時、東方で高句麗は百濟及び日本と争ひ、その日本・百濟は北朝に殆んど通貢せず、南朝にのみ通貢してゐたから⁽¹⁶⁾、當時の大勢より見れば、南北朝時代には、強盛なる北魏・高句麗の連合に對して、日本・百濟から南朝を経て、吐谷渾より柔然に至る大連繫があつたと見ることも不可能ではないであらう。

註(1) 史學雑誌四八ノ一一、一二。

(2) 東洋學報二七ノ一。

(3) 同一〇四頁。

(4) この年紀のみは宋書本紀に據る。

(5) 楊守敬「西秦疆域圖」。

(6) 魏書卷九十九乞伏氏傳。

(7) 魏書帝紀は此の間に一回も吐谷渾の貢獻を傳へてゐないが、魏書吐谷渾傳によると、本文に後述の如く極めて稀に遣使があつたのである。

(8) 魏書吐谷渾傳及び梁書河南傳は度易侯とし、南齊書河南傳は易度侯とする。

(9) 宋書卷九十八氐傳。

(10) 志田不動磨氏「南北朝時代の財政經濟」(東洋文化史大系二 漢魏六朝時代所收)。

吐谷渾と南北兩朝との關係について (和田博德)

- (11) 岡崎文夫博士「魏晉南北朝通史」二三〇—三一四頁。
- (12) 抽稿「百濟の遼西領有説について」史學二五ノ一。
- (13) 「吐谷渾遣使考」史學雜誌四八ノ一二、六四—六六頁。
- (14) 宋書卷六孝武帝本紀大明三年(四五九)十一月の條に「西域獻舞馬」とある。しかしこれは西域の國家の貢獻ではなくて、西域商人の貢獻であらう。もし西域の國家の貢獻であれば、その國の名を明記してある筈である。西域商人なれば、北魏を経て宋に行くことも出來たらう。宋書卷九十五索虜傳の最後に栗特國等の貢獻を傳へてゐるのも、北魏を通つて來たかゝる商人の貢獻ではなからうか。
- (15) 周書卷二十八史寧傳。
- (16) 抽稿「百濟の遼西領有説について」史學二五ノ一。

遣米使節の米國議會見學

村垣範正の航海日記の一節に議會の様子を日本橋の魚河岸の如しと評して居る事は有名な事で。議會に對する知識の無い事を示す適例にされて居るが、同使節の一員勘定組頭森田清行の亞行日記閏三月廿六日條に、「議事官セルメン申聞候ハ合衆國英ノ屬ヲハナレ當年八十一年目ノコングレス官ニテコングレスノ義者プレシテントモ不相拒尤コングレスニテ確定イタシ命ヲ下シ候事ハ不相成候由英國ノ爵房薦紳房ノ類也」と記して居る。

爵房薦紳房は、英人ウキリアムスの輯譯せる地理全志に使用されて居る譯字であり、此書は安政六年鹽谷世弘の訓點に依る日本版が出て居る。恐らく森田は此書に依り一應議會制度なるものを知つて居たのであらう。その爲か議會見學の時も、別段奇異の感を抱かなかつた様で、先日渡米議員團が輸入した議長の使用する場内制止用の木槌の事等を記して居る觀察は、なかなか鋭いものがある。

(河北 展生)